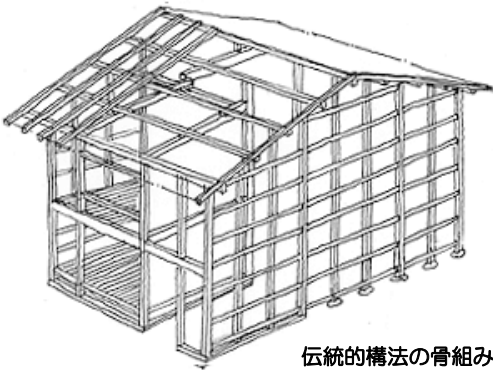
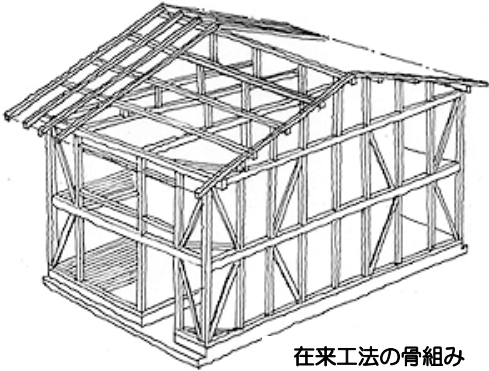


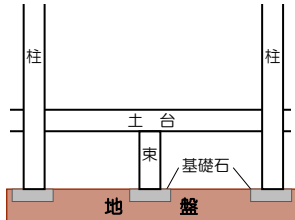
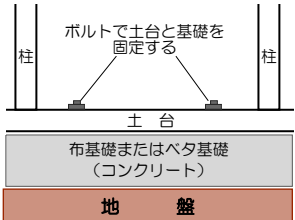


【参考】伝統的構法と在来工法の主な違い

「在来工法」が筋交いや付属金物や構造用合板で壁量を確保して構造耐力を確保するのに対し、「伝統的構法」は壁量に頼らず、構造架構、すなわち木組みそのもので家を建てるということで、大きな木を柱と梁として力強く組み合わせることによって耐力を生み出す考え方です。

下表は、伝統的構法と在来工法を簡単に比較したものです。

項目	伝統的構法	在来工法
骨組みの模式図	 <p style="text-align: center;">伝統的構法の骨組み</p>	 <p style="text-align: center;">在来工法の骨組み</p>
参考写真		
耐力要素	<ul style="list-style-type: none"> ○ 柱・梁・差鴨居等加工してある長木 ○ 貫（ぬき） ○ 竹小舞（たけこまい）と土壁 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 筋交い、または構造用合板等を張った耐力壁 ○ ホールダウン金物をはじめとする、構造金物
地震時の建物の変形	大きい（変形しやすい）	小さい（変形しにくい）
地震時の建物の揺れ	比較的大きい	比較的小さい
粘り強さ	大きい（初期強度や建物の剛性は小さく柔らかい建物だが、その分粘り強く、大きな地震エネルギーを受けても倒壊しにくい）	小さい（初期強度や建物の剛性は高く、硬い建物だが、粘り強さは伝統的構法に比べて小さい）
標準的な基礎の仕様	 <p style="text-align: center;">伝統的構法の基礎部</p>	 <p style="text-align: center;">在来工法の基礎部</p>

※ 上表はあくまでも目安であり、個別の事例においては、必ずしも上表と一致しない部分があり得ます。